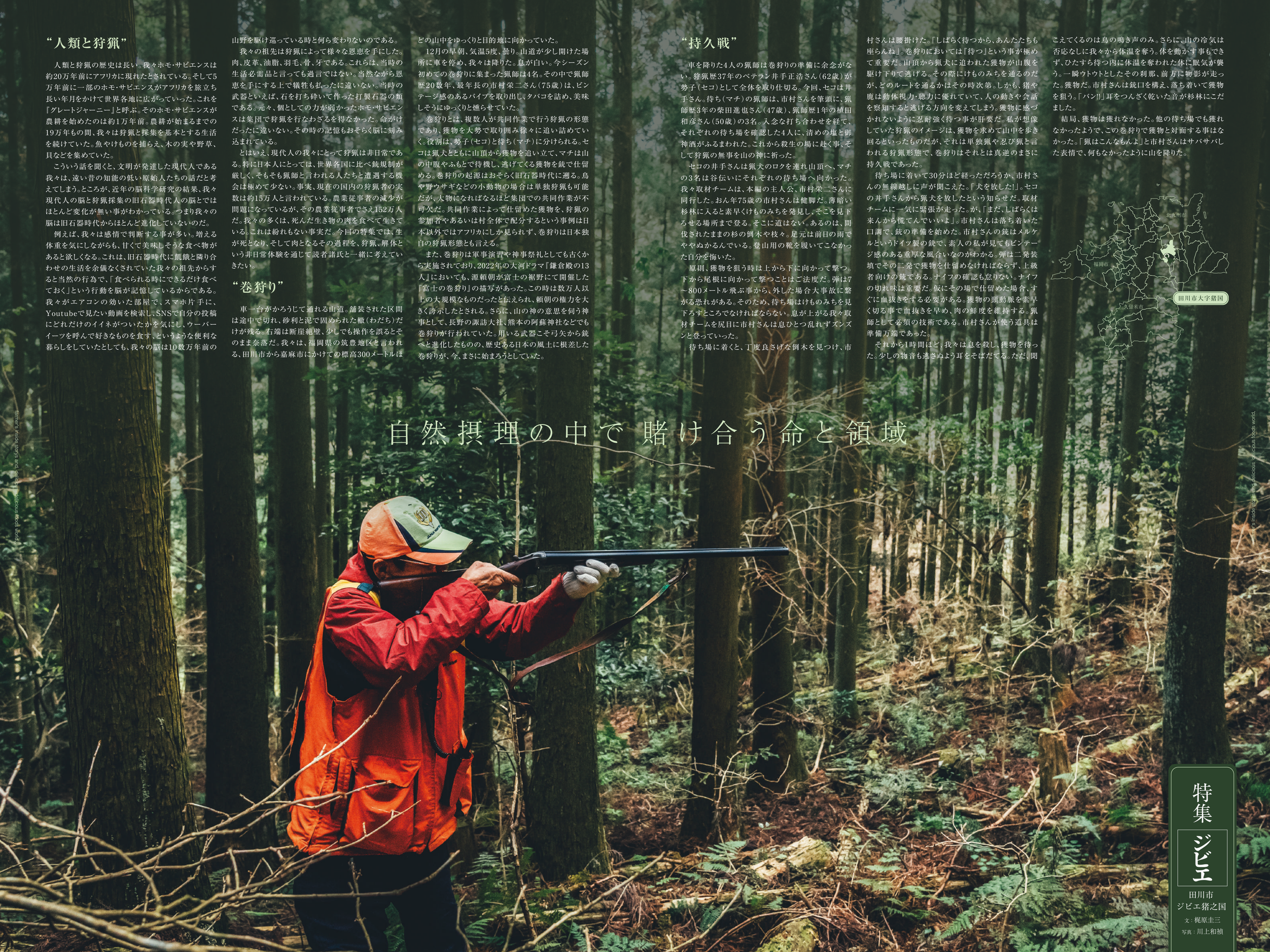
自然摂理の中で賭け合う命と領域



“人類と狩猟”

人類と狩猟の歴史は長い。我々ホモ・サピエンスは約20万年前にアフリカに現れたとされている。そして5万年前に一部のホモ・サピエンスがアフリカを旅立ち長い年月をかけて世界各地に広がっていった。これを『グレートジャーニー』と呼ぶ。そのホモ・サピエンスが農耕を始めたのは約1万年前。農耕が始まるまでの19万年もの間、我々は狩猟と採集を基本とする生活を続けていた。魚やけものを捕らえ、木の実や野草、貝などを集めていた。

こういう話を聞くと、文明が発達した現代人である我々は、遠い昔の知能の低い原始人たちの話だと考えてしまう。ところが、近年の脳科学研究の結果、我々現代人の脳と狩猟採集の旧石器時代人の脳とではほとんど変化が無い事がわかっている。つまり我々の脳は旧石器時代からほとんど進化していないのだ。

例えば、我々は感情で判断する事が多い。増える体重を気にしながらも、甘くて美味しそうな食べ物があると欲しくなる。これは、旧石器時代に飢餓と隣り合わせの生活を余儀なくされていた我々の祖先からすると当然の行為で、「食べられる時にできるだけ食べておく」という行動を脳が記憶しているからである。我々がエアコンの効いた部屋で、スマホ片手に、Youtubeで見たい動画を検索し、SNSで自分の投稿にどれだけのイイネがついたかを気にし、ウーバーイーツを呼んで好きなものを食す、というような便利な暮らしをしていたとしても、我々の脳は10数万年前の山野を駆け巡っている時と何ら変わりないのである。

我々の祖先は狩猟によって様々な恩恵を手にした。肉、皮革、油脂、羽毛、骨、牙である。これらは、当時の生活必需品と言っても過言ではない。当然ながら恩恵を手にする上で犠牲も払ったに違いない。当時の武器といえば、石を打ち砕いて作った打製石器の類である。元々、個としての力が弱かったホモ・サピエンスは集団で狩猟を行なわざるを得なかった。命がけだったに違いない。その時の記憶もおそらく脳に刻み込まれている。

とはいえ、現代人の我々にとって狩猟は非日常である。特に日本人にとっては、世界各国に比べ銃規制が厳しく、そもそも猟師と言われる人たちと遭遇する機会は極めて少ない。事実、現在の国内の狩猟者の実数は約15万人と言われている。農業従事者の減少が問題になっているが、その農業従事者でさえ152万人だ。我々の多くは、死んだ生き物の肉を食べて生きている。これは紛れもない事実だ。今回の特集では、生が死となり、そして肉となるその過程を、狩猟、解体という非日常体験を通じて読者諸氏と一緒に考えていきたい。

“巻狩り”

車一台がかろうじて通れる山道。舗装された区間は途中で切れ、砂利と泥で固められた轍（わだち）だけが残る。右端は断崖絶壁、少しでも操作を誤るとそのまま奈落だ。我々は、福岡県の筑豊地区と言われる、田川市から嘉麻市にかけての標高300メートルほどの山中をゆっくりと目的地に向かっていた。

12月の早朝、気温5度、曇り。山道が少し開けた場所に車を停め、我々は降りた。息が白い。今シーズン初めての巻狩りに集まった猟師は4名。その中で猟師歴20数年、最年長の市村栄二さん（75歳）は、ビンテージ感のあるパイプを取り出し、タバコを詰め、美味しそうにゆっくりと燻らせていた。

巻狩りとは、複数人が共同作業で行う狩猟の形態であり、獲物を大勢で取り囲み徐々に追い詰めていく。役割は、勢子（セコ）と待ち（マチ）に分けられる。セコは猟犬とともに山頂から獲物を追い立て、マチは山の中腹やふもとで待機し、逃げてくる獲物を銃で仕留める。巻狩りの起源はおそらく旧石器時代に遡る。鳥や野ウサギなどの小動物の場合は単独狩猟も可能だが、大物になればなるほど集団での共同作業が不可欠だ。共同作業によって仕留めた獲物を、狩猟の参加者やあるいは村全体で配分するという事例は日本以外ではアフリカにしか見られず、巻狩りは日本独自の狩猟形態とも言える。

また、巻狩りは軍事演習や神事祭礼としても古くから実施されており、2022年の大河ドラマ『鎌倉殿の13人』においても、源頼朝が富士の裾野にて開催した『富士の巻狩り』の描写があった。この時は数万人以上の大規模なものだったと伝えられ、頼朝の権力を大きく誇示したとされる。さらに、山の神の意思を伺う神事として、長野の諏訪大社、熊本の阿蘇神社などでも巻狩りが行われていた。用いる武器こそ弓矢から銃へと進化したものの、歴史ある日本の風土に根差した巻狩りが、今、まさに始まろうとしていた。

“持久戦”

車を降りた4人の猟師は巻狩りの準備に余念がない。狩猟歴37年のベテラン井手正浩さん（62歳）が勢子（セコ）として全体を取り仕切る。今回、セコは井手さん。待ち（マチ）の猟師は、市村さんを筆頭に、猟師歴3年の柴田進也さん（47歳）、猟師歴1年の植田和彦さん（50歳）の3名。入念な打ち合わせを経て、それぞれの待ち場を確認した4人に、清めの塩と御神酒がふるまわれた。これから殺生の場に赴く事、そして狩猟の無事を山の神に祈った。

セコの井手さんは猟犬のロクを連れ山頂へ、マチの3名は谷伝いにそれぞれの待ち場へ向かった。我々取材チームは、本編の主人公、市村栄二さんに同行した。おん年75歳の市村さんは健脚だ。薄暗い杉林に入ると素早くけものみちを発見し、そこを見下ろせる場所まで登る。そこに道はない。あるのは、間伐されたままの杉の倒木や枝々。足元は前日の雨でややぬかるんでいる。登山用の靴を履いてこなかった自分を悔いた。

原則、獲物を狙う時は上から下に向かって撃つ。下から尾根に向かって撃つことはご法度だ。弾は7～800メートル飛ぶ事から、外した場合大事故に繋がる恐れがある。そのため、待ち場はけものみちを見下ろすところでなければならない。息が上がる我々取材チームを尻目に市村さんは息ひとつ乱れずズンズンと登っていった。

待ち場に着くと、丁度良さげな倒木を見つけ、市村さんは腰掛けた。「しばらく待つから、あんたたちも座らんね」。巻狩りにおいては『待つ』という事が極めて重要だ。山頂から猟犬に追われた獲物が山腹を駆け下りて逃げる。その際にけものみちを通るのだが、どのルートを通るかはその時次第。しかも、猪や鹿は動体視力・聴力に優れていて、人の動きや会話を察知すると逃げる方向を変えてしまう。獲物に感づかれないように忍耐強く待つ事が肝要だ。私が想像していた狩猟のイメージは、獲物を求めて山中を歩き回るといったものだが、それは単独猟や忍び猟と言われる狩猟形態で、巻狩りはそれとは真逆のまさに持久戦であった。

待ち場に着いて30分ほど経っただろうか、市村さんの無線越しに声が聞こえた。「犬を放した!」。セコの井手さんから猟犬を放したという知らせだ。取材チームに一気に緊張が走った。が、「まだ、しばらくは来んから慌てんでいいよ」。市村さんは落ち着いた口調で、銃の準備を始めた。市村さんの銃はメルケルというドイツ製の銃で、素人の私が見てもビンテージ感のある重厚な風合いなのがわかる。弾は二発装填でその二発で獲物を仕留めなければならず、上級者向けの銃である。ナイフの確認も怠りない。ナイフの切れ味は重要だ。仮にその場で仕留めた場合、すぐに血抜きをする必要がある。獲物の頸動脈を素早く切る事で血抜きを早め、肉の鮮度を維持する。猟師として必須の技術である。市村さんが使う道具は準備万端であった。

それから1時間ほど、我々は息を殺し、獲物を待った。少しの物音も逃さぬよう耳をそばだてる。ただ、聞こえてくるのは鳥の鳴き声のみ。さらに、山の冷気は否応なしに我々から体温を奪う。体を動かす事もできず、ひたすら待つ内に体温を奪われた体に眠気が襲う。一瞬ウトウトしたその刹那、前方に物影が走った。獲物だ。市村さんは銃口を構え、落ち着いて獲物を狙う。「バン!!」耳をつんざく乾いた音が杉林にこだました。

結局、獲物は獲れなかった。他の待ち場でも獲れなかったようで、この巻狩りで獲物と対面する事はなかった。「猟はこんなもんよ」と市村さんはサバサバした表情で、何もなかったように山を降りた。

特集
ジビエ
田川市
ジビエ猪之国

文：梶原圭三
写真：川上和禎

farmer's inside stories and delicious foods world